

考えこじき

小川未明

青空文庫

ひと
人というものは、一つのことをじつと考^{かん}えていると、ほかのことはわすれるものだし、
また、どんな場合^{ばあい}でも、考^{かん}えることの自由^{じゆう}を、もつものです。

ある日^ひ、清吉^{せいきち}は、おじさんと町^{まち}へ、いっしょにいきました。そして、おじさんが用^{よう}たしをしている、しばらくの間^{あいだ}、ひとり、そのあたりをさんぽして待^まつことにしました。一
けんの店^{みせ}では、いろいろの運動器具^{うんどうきぐ}をならべ、のきさきに写^{しゃ}真^{しん}などをかけていました。
すべてスポーツにかんするもので、ちょうど盛^{せい}夏^かも近^{ちか}づいたから、山岳^{さんかく}の風景^{ふうけい}や、溪^け
谷^{いこく}、海^{かい}洋^{よう}のけしきなどが、目^めにもしたしまれたのであります。

そのなかの一枚^{まい}は、のこぎりのはをたてたような、山^{さん}脈^{みやく}の姿^{すがた}であつて、もつとも高^{たか}
いいただきには、雪^{ゆき}が白^{しろ}くのこつていました。おそらく、夏^{なつ}の間^{あいだ}じゆう、とけることなく、
あたらしい雪^{ゆき}が、またその上^{うへ}につもるのでありましよう。そのほかの山^{やま}も、一つ、一つ、
個性^{こせい}があつて、あるものは、なんとなく近^{ちか}づきがたく、あるものは、なつかしみのもてる
ようなものでありました。というものの、どれもここからはとおいかなたにあり、いつ
たとしても、のぼるのは、よいではなかったのです。

想^{そう}像^{ぞう}するに、一日^{いちにち}じゆう、つめたいきりがかかったり、はれたりし、はげしい風^{かぜ}に木^こ

立^{たち}がざわめき、鳥^{とり}のなく声^{こえ}のほかに、しんとして、べつにおとずれる人^{ひと}も、まれだったでありましょう。一年^{ねん}じゆうがそうであり、百年^{ねん}の間^{あいだ}が、そうであつたにちがいない。そしてこの山々^{やまやま}は、昔^{むかし}も、今^{いま}も、永^{えい}久^{きゆう}にだまつているのでした。

けずりをかけたような、がけの上に立^たち、谷^{たに}をへだてて、前^{ぜん}方^{ほう}のいただきを見^み上^あげる人^{ひと}があります。その人^{ひと}は、自然^{しぜん}を愛^{あい}するために冒^{ぼう}険^{けん}をしたのでしよう。足^{あし}もとの下^{した}は、すぐ千^ちじんのそことなつて、急^{きゆう}流^{りゅう}が白^{しろ}ぎぬをさくように、みだれちらばっている石^{いし}につきあたつて、しぶきをあげています。

写真^{しゃしん}に見^みいつた清^{せい}吉^{きち}は、耳^{みみ}へ水^{みず}音^{おと}を、感^{かん}じるのでした。

「もし、この人^{ひと}が、自分^{じぶん}だつたら。」

かれは、よくこんな空^{くう}想^{そう}をします。それから、かつてにその先^{さき}をつづけるのでした。自分^{じぶん}は、はたして、このきりぎしの上^{うへ}に立^たつだけの勇^{ゆう}氣^きがあるうか。足^{あし}がわくわくして目^めがくらみはしないだろうか。ひつきよう、勇^{ゆう}氣^きのないものは、いくら美^{うつく}しいものがあつても、鑑^{かん}賞^{しょう}するどころか、ただおそれをおぼえるぐらいのものだと思^{おも}いました。

写^{しゃ}真^{しん}から目^めをそらすと、自分^{じぶん}はあまりに異^{こと}なつた世^せ界^{かい}に立^たつていたのでした。電^{でん}車^{しゃ}には、乗^{じよう}客^{きゃく}が、すずなりにつかまつているし、トラックは、重^{おも}そうな荷^にをいっぱい

んで走るし、自転車は、たがいに競争するように、前後にとんでいるのです。

かれは、店さきをはなれ、ちがった意味のなまなましいゆううつを感じながら、下を見て歩くうちに、もうすこしで、道の上につきでた、鉄棒の先へつまずこうとしました。

「あぶない、なんだろう？」

すぎかけたのを、わざわざもどつて、それをみつめたのでした。たぶん戦災のなごりであろうか、なにかのこわれた金物が、道に埋まっているのです。

さいわい、自分は、つまずいてけがをしなかったが、だれか、けがをする人があるにちがひなからう。そう思うと、かれにとつては、まったくとつぜんのできごとだったけれど、そのままいきすぎしてしまうことを、良心が許さなかったのです。

「さあ、どうしたら、いいだろうか。」

いままで、頭の中を占領していた、ふかい谷や山も、また、きりや、雲もどこへか、あとなく、煙のようにきえてしまつて、そのかわり、きたないしみのように、現実のなやみが、全心をとらえたのでした。目をとじたり、頭をふつたりしてもすぐに解決のできぬことだけに、いらだたしい気持ちとなりました。そして、早く、このなやみから、のがれる方法を見いだそうとしたのでした。それには、ここに、一つの例外がある。

「よほどのとんまでなければ、これにつまずくものはない。」ということです。

もしそうきめられれば、なにも問題はないのであるが、はたして、この場合、だれにたいしても、こういう叡智を信ずることができるだろうか。もし信じられぬとすれば、この後に起こるであろうできごとに、自分はまったく責任がないとはいえぬのであると考えられるのでした。

清吉は、じつさいについて、これを知ろうと、すこしはなれた電柱のところに立つて、往来の人々のようすを見守ったのでありました。くつの人、げたの人、ぞうりの人、また、ゴムたびをはいたものと、じつに、人々のはきものは、いちようではなかったけれど、どの人も、その鉄棒の頭をふんだり、つまずくものはなかったのであります。それは、みんなの注意がいきとどくからとはいえなかった。なぜなら、なかには、上をむいていくものの、横を見ながら、足もとには、てんで注意をしないものもいるからでした。

考えればじつにふしぎなことです。

「すべてが、偶然に支配されているとしか思えない。それに、人間には、つねに六感がはたらくからだろう。」

こうして、なんでもないとところに、かれは真理の顔がうかがわれるような気がしました。ちようど、そんなことを考えているときでした。

「清吉、たいへん待たせて、すまなかつたね。」と、おじが、いそいでやってきました。

かれは、うしろに心をひかれながらも、おじといっしょに、電車に乗って、そこを立ち去らなければならなかつたのであります。そして、だれから、いわれたというわけではないが、かれは、そのままかえつたのをひきようとして、みずからの勇氣なさを後悔しました。わすれようとしても、目の前へ、つまりいてたおれる人の姿が浮かんで、自分を苦しめ、むちうつたのであります。とちゅう、おじから、なにを話しかけられても、朗らかな返答ができませんでした。ちようど、その氣持ちは、学校で、いくら考えても、算術の答えができなかつたときのよう、頭のなか、もやもやとしていたのです。

清吉は自分のへやへはいつて、ひとりとなりました。そして、また考えこみました。「たしかに危険で、注意しなければならぬことだった。それをどうして、なんともせず、ほうつてきたのだろうか。」

かれは、自分に向かつて、問いたただすのでした。そしてみずから、答えるのでした。

なにもすることのできなかったのは、要するに、自分に、勇氣というものが、かけていたのだ。勇氣さえあれば、正しいはんだんにしたがつて、できるだけのことをしたであろう。そうすれば、いまごろ、なんのやくにもならぬ後悔など、しなくてもよかったのだ。清吉は、おのれの欠点と、良心を苦しめなければならぬ病所に気づいたとき、これからすぐにも金づちをたずさえて、さっきの場所へにかけていつて、鉄棒の頭を力いっぱい、たたきこんでこようと、ためらいましたが、時間がたつにつれ、一時燃えた情熱もしぜんとうすらいでしまったのです。かれは、勇氣も情熱もなければ、なまなかの良心は、ただみずからを不愉快にするばかりで、用のないものだときとりました。

そのうちに、とうとう、その日の晩方となりました。清吉は、あそびに外へでて、友だちと、道の上で、ボールをなげていました。なお、ときどき、ひるまのことを思い出して鉄棒の先が、目にちらつき、急になんだか、おもしろくなるのでした。

そういえば、いま自分たちのあそんでいる道が、またなんといたんでいることであろうと気がついたのでした。戦時中にあいたあなが、まだそのままになっていいるのです。

「ねえ、きみ！ 夜分通る人が、このあなへおちないだろうかね。」と、清吉は、道の

上^{うえ}のあなをゆびさして、友^{とも}だちにはなしかけました。

「さあ、おちるものもあるだろう。」

「けがをしないかね。」

「運^{うん}が悪^{わる}ければね、そのときの、ひようしき。」と、友^{とも}だちのひとり、答^{こた}えました。
そうきくと、清^{せい}吉^{きち}は、それだけですまされることだろうかと思^{おも}った。

「いったい、だれが、修^{しゅう}繕^{ぜん}しなければならぬのだろうかね。」と、清^{せい}吉^{きち}は、いいま
した。責^{せき}任^{にん}をもつものの怠^{たい}慢^{まん}がはらだたしかったのです。

すると、いつも元^{げん}氣^きで、快^{かい}活^{かつ}なK^ケが、

「どこかに責^{せき}任^{にん}はあつても、あまり多^{おほ}すぎで手^てがつけられないのだろう。」と、答^{こた}えま
した。

「はやくなおさなければ、老^{ろう}人^{じん}や、めくらがおちてあぶないがなあ。」

「そう、近^{きん}所^{じょ}の人^{ひと}が、氣^きがついたら、早^{はや}くなおせればなおすんだね。」

K^ケは、いつものように、にこにこして、ほとんど、むとんじやくでした。

ひとり、清^{せい}吉^{きち}は、まだ考^{かん}えこんでいました。こうしたことは、どこへうったえ出^でれば
いいのだろうか。こればかりでなく、身^みのまわりに、たくさん解^{かい}決^{けつ}のつかぬことがある

ような気がして、くよくよしたのでした。

「いったい、だれに責任があるのだろうか。」と、清吉はあくまでも思ったのです。

「清ちゃん、なにしてんの？ はやく、たまをおなげよ。」と、Kは、さいそくしました。

「考えていたのだよ。」

「どんなことさ？ 考えたってしかたがないじゃないか。だれでも、できることは、自分でするんだよ。考えこじきの銭とらずというのだろう。」

「よし、わかった！ こんどは強いただぞ！」と、清吉は、はじめてほがらかにさけびました。

「いいよ。」

まさに、日はくれようとしていました。そして、はるか西北の、だいだい色の空に、むらさき色をしたひとつづきの山脈が、頭をならべていました。それをみて、清吉は、写真にあった、山や谷を思い出しました。いまごろは、そこも、夕やみがせまったであろう。そして、深山の静けさをやぶって、岩にはげしくつきあたる流れが、白くあわだつであろうと思いました。

せみの声に、耳をすましながら、往來に立っていると、かえりをいそぐ人々の顔に

はよろこびがあふれ、みな愉快^{ゆかい}そうでした。

そのとき、K^{ケー}の、大きな声^{おほこえ}が、夕映^{ゆうば}えの空^{そら}に、はずみかえって、B^{ビー}や、Y^{ワイ}と三人^{にん}が、こちらへかけてきました。

「清^{せい}ちゃん、道^{みち}をなおそうよ。」といいました。みんなが、手^てに土^{つち}をはこぶバケツや、くわをもっていました。

「ああ、なおそう！」

清^{せい}吉^{きち}は、自分^{じぶん}にも氣^きづいた、わるいくせをやぶり、明^{あか}るい世界^{せかい}へつれだされて、みんなといっしょに、心^{こころ}からたのしく、星^{ほし}の出^ではじめるころまで、語^{かた}ったり、笑^{わら}ったりして、もにはたらき、熱^{ねっしん}心に道^{みち}をなおしていたのです。

「考^{かん}えこじき。」と、K^{ケー}の、いったことを思^{おも}いだして、清^{せい}吉^{きち}が笑^{わら}っていると、

「あすから、たまをなげるのにも、あぶくないよ。」と、K^{ケー}は、にこにこしながら、いったのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「赤い雲のかなた」小峰書店

1949（昭和24）年1月

初出：「子供の広場」

1946（昭和21）年7、8月合併号

※表題は底本では、「考《かんが》えこじき」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

考えこじき

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>